

築田氏の動向

(やなだしのどうこう)



関宿城跡 市指定史跡

築田氏(やなだし)は、中世後期の野田市を代表する領主です。足利庄築田郷(あしかがのしょうやなだごう)(栃木県足利市)を名字の地とする在地武士だったようで、15世紀前半ごろに鎌倉府から野田市周辺に所領を与えられたと思われます。その時期の当主である築田助良(すけよし)の娘が、足利持氏(もちうじ)の側室となったため、鎌倉公方(かまくらくぼう)とのつながりが強くなりました。助良の娘は、初代の古河公方足利成氏(こがくぼうあしかがしげうじ)を生んでいます。

戦国時代、助良の子持助(もちすけ)は成氏の重臣となって関東管領(かんとくかんれい)上杉氏と抗争したり、和平交渉にあたりたりしています。そのころから、本格的に市内の関宿城を居城とするようになりました。16世紀初頭、持助の孫高助(たかすけ)は古河公方家の内紛に際して成氏の孫高基(たかもと)を支持して勝利します。これにより、高助は公方家最大の重臣になりました。

しかし、やがて小田原城の北条氏綱(ほうじょううじつな)が南関東から進出し、公方晴氏(はるうじ)(高基の子)と姻戚関係を結びます。高助は、氏綱との間には距離を置いていたようです。さらに、氏綱の子氏康(うじやす)の時代になると、晴氏に圧力を加えて北条の血を引いた義氏(よしうじ)に家督を譲らせ、さらに対立した晴氏を拘束しました。高助の子晴助(はるすけ)は当初義氏に従いましたが、越後上杉氏が関東へ進入した際に反旗をひるがえしました。以後、三回にわたって、後北条氏・義氏勢力によって関宿城を攻撃されます。

天正2年(1574)、築田晴助らは抗しきれずに降伏し、関宿城を退去して水海城(みづみじょう)(茨城県古河市)へ移りました。ただし、古河公方家の重臣としての立場は変わりませんでした。小田原合戦後、築田氏の子孫は徳川氏に仕えて明治維新まで幕臣として存続していきます。

《詳しくは…》

- * 千葉県立関宿城博物館編 2001 『戦国の争乱と関宿』千葉県立関宿城博物館
- * 千葉県立関宿城博物館編 2002 『築田家文書』千葉県立関宿城博物館

天正文書

「築田持助朱印状」

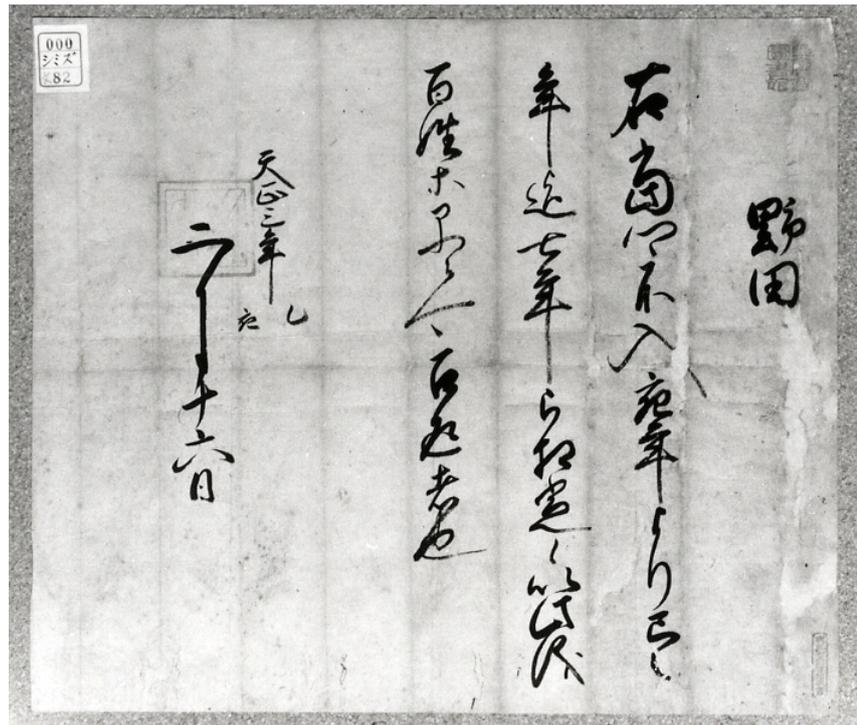
天正3年

市指定有形文化財

(興風図書館所蔵)

「野田」の地名入文書

として最古のもの



目吹城の遠景 (推定地)

永禄5年(1562)正月

に後北条方が守備する

目吹城を築田晴助が攻

略した (鮎川文書)

